

かれよとぞ宣ひける。入道相國、日ごろはさしもゆゑ、まうおはせしか共、今はの時にもなりしかば、世にもくるしげにて、いきの下にて宣ひけるは、當家は、保元平治より此かた、度々の朝てきをたいらげ、げんまやう身にあまり、かたじけなくも、一天の君の御外せきとして、せうまやうの位にいたり、ゑいぐわすでに子孫にのこす、今生ののぞみは、一事も思ひをく事なし、たゞ思ひおく事としては、兵衛のすけより朝がかうべを見ざりつる事こそ、何より又ほいなけれ、我いかにもなりなん後、佛事けうやうをもすべからず、堂塔をも立べからず、いそぎうつ手をくだし、頼朝がかうべをはねて、わがはかのまへにかくべし、それを今生後生の、けうやうにてあらんずるぞと宣ひけるこそ、いとゞつみふかうは聞えし。

〔太平記十六〕正成下向兵庫事

正成、是ヲ最期ノ合戦ト思ケレバ、嫡子正行ガ今年十一歳ニテ供シタリケルヲ、思フ様有トテ、櫻井ノ宿ヨリ、河内ヘ返シ遣ストテ、庭訓ヲ殘シケルハ、獅子子ヲ産デ、三日ヲ經ル時、數千丈ノ石壁ヨリ、是ヲ擲、其子獅子ノ機分アレバ、教ヘザルニ中ヨリ、馱返リテ、死スル事ヲ得ストイヘリ、況ヤ汝已ニ十歳ニ餘リヌ、一言耳ニ留ラバ、我、教誠ニ違フ事ナカレ、今度ノ合戦、天下ノ安否ト思フ間、今生ニテ、汝ガ顔ヲ見ン事、是ヲ限リト思フ也、正成已ニ討死スト聞ナバ、天下ハ必ず將軍足利尊氏ノ代ニ成ヌト心得ベシ、然リト云共、一旦ノ身命ヲ助ラン爲ニ、多年ノ忠烈ヲ失テ、降人ニ出ル事有ベカラズ、一族若黨ノ一人モ死殘テ、アラン程ハ、金剛山ノ邊ニ引籠テ、敵寄來ラバ、命ヲ養由ガ矢サキニ懸テ、美ヲ紀信ガ忠ニ比スベシ、是ヲ汝ガ第一ノ孝行ナランズルト、泣々申合メテ、各東西ヘ別レニケリ、

〔細川頼之記〕貞治六年四月六日、鎌倉之左馬頭基氏足利卒ス、中上杉入道憲ニ、若君春王殿ヲ守立可申ノ由被仰付、但東國ノ事ハ、將軍ノ仰ニ隨フベシ、又若君ノ御事ハ、千葉介、結城大藏次郎、